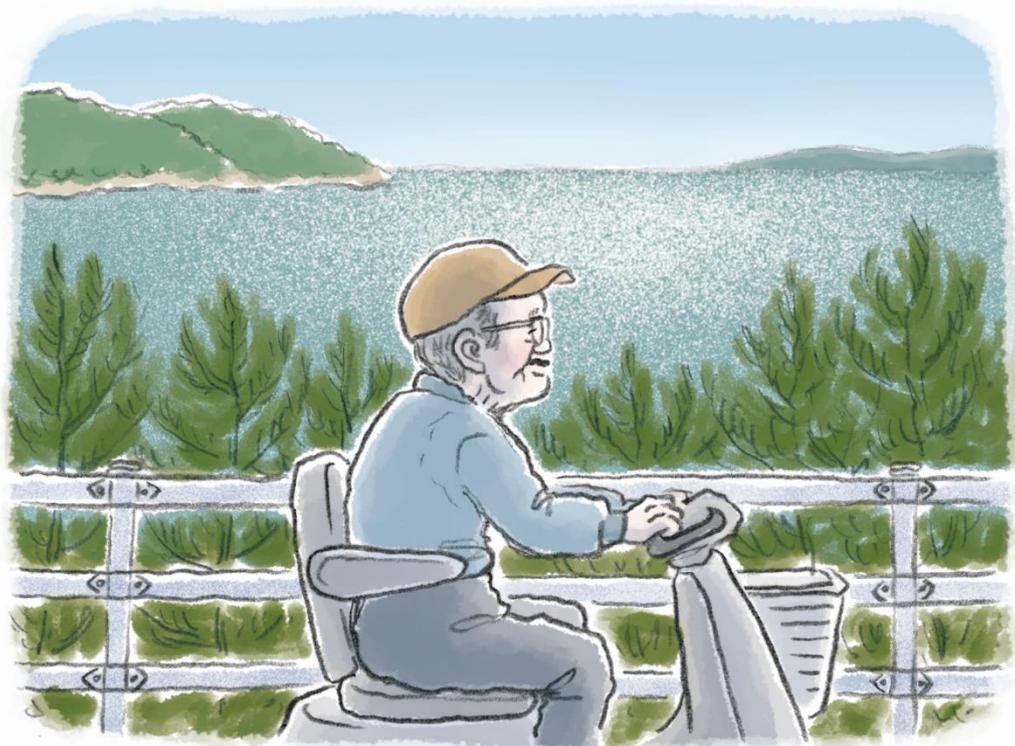


なかおしんじ物語



なかおしんじさんは今、岡山県の瀬戸内海の小島、長島ながしまに住んでいます。奈良で生まれたなかおさんがどうして長島で暮らしているのでしょうか。そこにはどんないきさつがあったのでしょうか。

長島には、かつてハンセン病になった人たちの病院施設である国立療養所「長島愛生園あいせいえん」があります。なかおさんがこの愛生園に入所したのは昭和二十三年（一九四八）六月のことでした。

昭和九年（一九三四）、奈良県に生まれたなかおさんは、お父さんを病気で亡くしましたが、お母さんと四つ年上のお兄さんと三人で、仲良く元気に暮らしていました。

なかおさんが中学一年生のある日、なかおさんの胸に赤い斑点ほんてんみないなものができました。あまり気にせず、日々を過すごしていました。いつまでたってもその赤い斑点はなかなか消えなかつたので、お母さんとあちこちの病院に行きました。でも原因が分からず、治らなかつたので、大きな大阪大学病院に行くことになりました。

なかおさんはお医者さんの前に座すわり、胸を見てもうりました。そのあとお医者さんはなかおさんがいないところで、お母さんとお兄さんに言いました。

「うーん、これはハンセン病だね。」

ハンセン病？ 初めて聞く病気です。さらにお医者さんが続けて言いました。

「これは療養所に入院しないといけない。今度自分が愛生園に用事があるときに、一緒に行こう。」

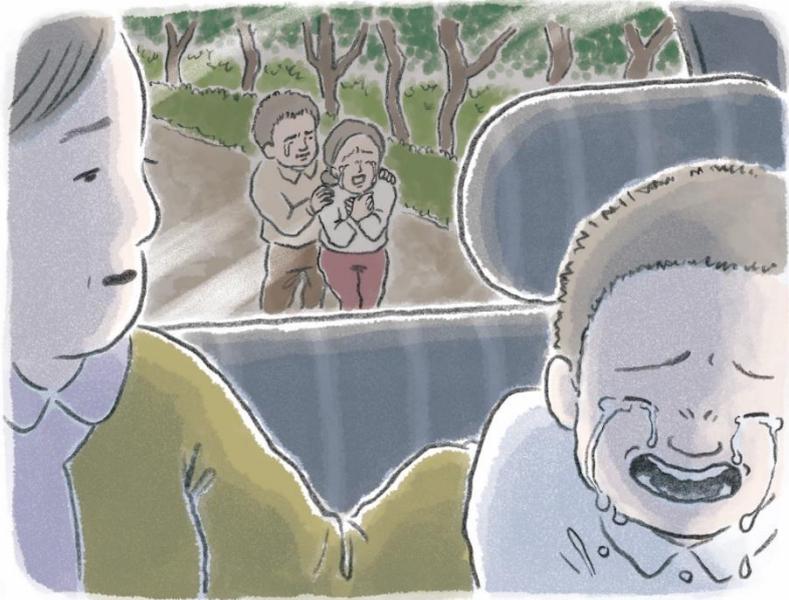
と言いました。その当時、ハンセン病と分かったらすぐに入院手続きをしなければいけませんでしたが、目の前のお医者さんはそうは言いませんでした。なかおさんは病院を後にし、そのまま中学校に通いました。

なかおさんが中学校二年生になったある日、校長室の掃除当番をしていたら、急に全校放送が聞こえました。

「なかおさん、すぐに家に帰りなさい。」

すぐに家に帰ったなかおさんは、一週間後に愛生園に入所することを知らされました。そこから一週間のあいだ、なかおさんは学校に行かずに、入所するためのいろいろな準備をしました。お母さんから縫物を習ったり、ご飯の炊き方を習ったり、お兄さんからは悪い人に負けないようにとケンカのやり方を習ったりして、あつという間に一週間が過ぎていきました。

いよいよ入所の日、大阪大学病院に行ってお母さん・お兄さんとお別れしました。その後、お医者さんたちと汽車に乗って岡山駅まで行きました。迎えの車に乗って港まで行くと、今度は船に乗って愛生園に向かいました。船がいたところは収容棧橋しゅうようせきばしと言って患者さんだけが使う橋で、中尾さんはそこで降ろされ、お医者さんは別の棧橋へと向かって別れたので、とても寂しい気持ちとなりました。





なかおさんはそのまま收容所しゅうようじょという建物に連れて行かれて、そこで一週間を過ごしました。その間に愛生園のお医者さんにハンセン病がどれだけ進行しているか、ハンセン病だけでなく他の病気にかかっていないかなどの診察を受け、そのあと子どもたちが入る少年舎しょうねんしゃという寮りょうに入りました。

当時はハンセン病にかかると、大人だけでなく子どもたちも療養所に入所しました。その子たちのために、愛生園には少年舎の向かいに愛生学園という小学校と中学校がありました。なかおさんが愛生学園の中学校に入ったときは、島の外から派遣された先生は一人だけで、あとは大人の入所者の中から先生が選ばれて授業をしました。

無事に中学校を卒業すると、なかおさんは十八歳までの三年間を少年舎にあった農区(畑)を耕す仕事をしました。麦・サツマイモ・ジャガイモ・カボチャなどを作って自分たちのおやつになったりもしました。そのころは、まだ少年舎にいたとはいえ、自分たちで何もかもしないとけません。食事当番になったらお魚をさばいたり、焼いたり、調理したりするのが当たり前でした。何でも自分でする、それがごくごく普通でした。

昔はハンセン病の治療薬は大風子油たいふうしゆという薬だけでした。看護師さんが注射器ちゅうしやくきをもって、それぞれの部屋を回って注射していました。なかおさんが入園したころにプロミンという薬ができ、これも注射でしたが、ハンセン病が治る病気になったのです。



十八歳を過ぎて大人の寮に移ったなかおさんは、昭和二十七年（一九五二）に初めて奈良の家に帰る許可が出ました。喜んで家に帰ると、お兄さんが病気をされていて、お母さんから家の手伝いを頼まれて畑仕事などをしました。

しばらくして、なかおさんからお兄さんにこんな話を切り出しました。

「おれ、名前を変えたほうがいいかな。」

患者の人たちの中には、社会からの差別や偏見で家族に迷惑がかからないように、愛生園に入所するときに名前を変えたり、自分の名前を戸籍から抜いて自分という存在がいなかったことにしてしまったりする人がたくさんいました。なかおさんもそうしたほうがいいのかどうか迷って、お兄さんに聞いてみたのです。でもお兄さんは、

「どうしてそんなことを言うんだ。たった二人しかおらん兄弟じゃないか。」と怒ったように言ってくれました。それを聞いたなかおさんは名前を変えませんでした。

しばらくの間、畑仕事をしていたなかおさんのもとに、あるとき、近所のおばさんが食べ物をなかおさんの家に持ってきてくれました。「しんちゃん、何一つ変わってないじゃないか。」

と言いました。そのころ世の中ではハンセン病にかかると顔や体がとろけるなどということが言われていたのです。だから少しも変わっていないなかおさんには驚き、そんな話は嘘だったことが分かったのです。そんなこともあったけど、盆踊りに参加したりするなど楽しく里帰りを過ごす、なかおさんは再び愛生園に戻ったのでした。



愛生園での生活も長くなった昭和三十二年（一九五七）、なかおさんのお兄さんが結婚しました。赤ちゃんもできたころ、一本の電報でんぽうがなかおさんのところに届きました。そこには「すぐ帰れ」とだけ書いていました。園の許可をもらって汽車に乗り、奈良まで帰ったら、駅でお兄さんが待っていました。お兄さんは、

「今日は家にはいかん。旅館を予約しているから、そこに泊まれ。」
と言うのでした。

その夜、なかおさんはお兄さんと一緒にお店でご飯を食べました。いろいろ話して、なぜかお兄さんはいつも以上にお酒もたくさん飲んでいました。そして最後の最後に、お兄さんはなかおさんに涙ながらにこう語りました。

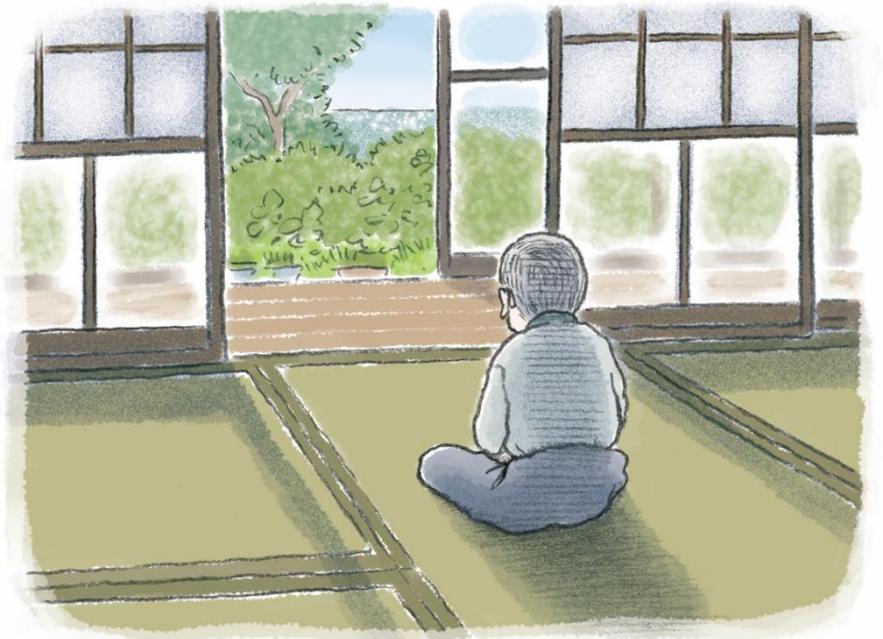
「自分は結婚して子どももできた。子どもが大きくなるまでは家に帰らないでくれ。」

なかおさんはしばらく考えて、

「ああ、いいよ。」

とだけ返事をしました。

その日を最後に、なかおさんは自分の生まれた家に一度も帰ることはありませんでした。そのあとお兄さんから連絡が来ることはなく、なかおさんには家族の様子が伝わることはありませんでした。



やがて昭和六十三年に、愛生園のある長島にも橋が架けられて、入所者が故郷を訪問したり、旅行したりすることが簡単にできるようになりました。なかおさんもふるさとの奈良を訪問することが増えてきました。

何回目の訪問だったでしょうか、あるときバスガイドさんがこっそりなかおさんを呼びました。ガイドさんがなかおさんに話してくれたのは、お母さんが亡くなっているという悲しい知らせでした。そのガイドさんはなかおさんのご近所だった家の人で、たまたまなかおさんのことを知り、教えてくれたのです。

「いつ亡くなったのですか。」

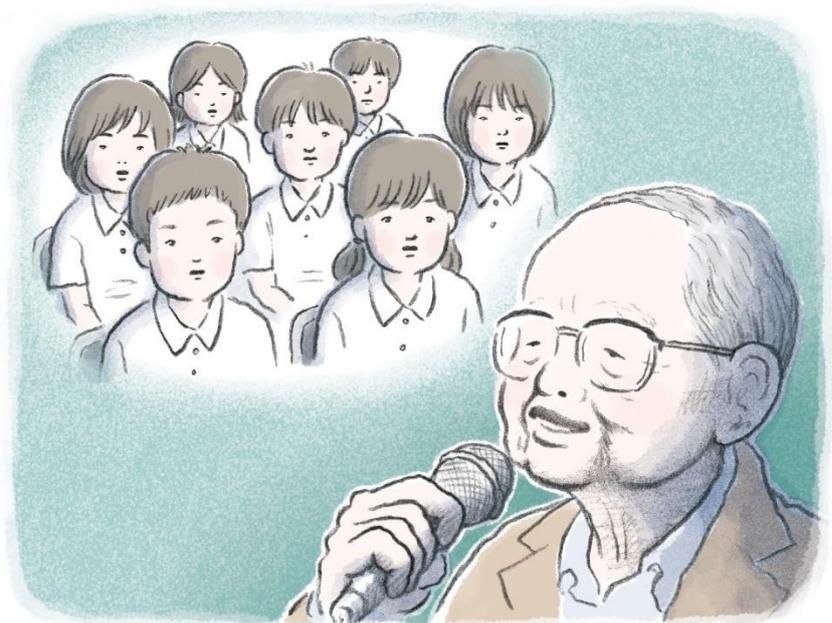
なかおさんがバスガイドさんに聞きました。

「わかりません、お墓を調べて、お手紙を書きます。」

親切にそう答えてくれました。

やがて、なかおさんのところにお手紙が届きました。そこにはお母さんの亡くなった年だけでなく、お兄さんが亡くなっていることも書かれています。奈良の食堂で泣きながらお別れした夜から、二度とお兄さんに会うこともできず、突然なかおさんは一人ぼっちになったことを知らされたのです。

何年か後、奈良のお兄さんとお母さんのお墓に手を合わせるなかおさんの姿がありました。心が定まらず、墓参りに行きたいけどなかなか行く決心がつかなかったなかおさんが、やっとお墓に手を合わせることができるようになるまでには、さらに長い月日が必要だったのです。



今、なかおさんは園を訪れる子どもたちやお客さんに語り部としてお話をしています。自分が体験してきたことや考えたこと、自分の思いなどを話すなかおさんの言葉に、聞く人は心が動かされます。真剣なまなざしで聞いている子どもたちに、「自分の体験や思いを、一人でも多くの次の世代に伝えていきたい」と、なかおさんもまた、真剣に、でも優しいまなざしで語りかけています。

きっと明日もまた、なかおさんは子どもたちの前にすわって、ゆっくりと話を始めることでしょう。

問1、最初は名前を変えなくてもいいと言っていたお兄さんが、泣きながらなかおさんに「家に帰らないでくれ」と言ったのは、どんな思いだったのでしょうか。

問2、なかおさんはお兄さんの言葉を聞いて、どのように感じたのでしょうか。

問3、なかおさんは子どもたちにどういふことを願って話をしているのでしょうか。